

手相などで、感情線、頭脳線、生命線と呼ばれてゐる線が三本共それ／＼獨立してゐて、いづれも合したり、交叉したりしてゐないものである。丁度この三つの線が三本で川と云ふ字の形になつてゐるのである。これが自然の掌に生ずる線の配置される形であるが、これがその人の労働や癖やでそれが移動してある點で合したり、ある點で交叉する事がある。それはかうした場合に生ずるのである。即ち、拇指と食指を主として使用する仕事などに従事する人の線は一番下側にある拇指の元を取り巻くやうに走つてゐる生命線と中央を流れてゐる頭脳線とが、拇指と食指の間で合したりする形になる。それが反對に小指の方に力を入れるやうな仕事をしてゐる人の手の線は、一番上の感情線と中央の頭脳線とが合して来るやうになり、それが、だん／＼強くなると二本が全く合して一本になつてしまふ事がある。さうした人の手は掌に二本だけ線があつて、掌を横に引かれた線のやうに走つてゐる事がある。

かうしたやうに川の字形からそれ／＼の癖に依つて變化して来るのであるから、あの點ではその人の技術が特徴づけられて来る事があるが、さうした線の變化の極端な人は世で云ふ名人かたぎと呼ばれる人があると思はれる。

平均して器用な人はこの線がやはり川の形になつたままのが理想的である。それは自然のままに手が發達した均衡のとれた手であるからである。と云つて寒玉翁のやうに世で云ふ名人の手は形が變る程に一方に於ける練習のためにその形までが變ると云ふやうな事があれば、勿論手の三本の線は川の字形から變化して、その運動に依つて生じた形になつてやはりその人の歩いて來た跡を物語つてゐる事と思はれるのである。

かうした手の線に就いては私は手相見ではないから必ずさうであると云ふ統計を持つてゐるわけではないし、又人の手相を調べ廻つた事もないのだが、掌や甲や手全體の形からさうした線に變化があると云ふ事に考へを推し進めたものであるが、花を開いて、手相拜見と云つてこの線を見るのと、それ程遠い相違はないものと思つてゐる。

吾々と同じやうに手先の器用さが賞用される仕事を持つてゐる人の手は川の字形に線のある自然に圓滿に發達した手の持主がよいのであるが、特にその手の持つある一部が發達したと云ふ場合もある。さうした時はその發達した部分が得手となつて多く働いたために、その人の仕事に一種の癖が出て來る事は考へられる事である。

そこで素直な作風を望んだり、満足な變化の少ない作家にならうとする人は子供の時から指や手

を圓滿に發達させるやうに、努力したり、指導する事が必要である。勿論その人の持ち味がその作品に非常に高い價值を興へるやうな事はあるから、千番に一番の幸運を引き當てると云ふやうな結果にならないとも限らないから、むしろ圓滿な手で、それを十分磨く事の方がよい事になる。

次に寒玉翁が猫を愛されたかどうかは知らないが、手先の器用な人や敏捷に働かせるやうな人や觸覺の敏感な人は猫好きに多い。

猫と器用とは妙な組合せであるが、子供の頃から猫を可愛がつた子供と犬を可愛がつて犬と遊んだ子供とは、成長するに従つてその行く道が變つて來て、それが明瞭になつて來る。併しこれも實驗する事が手軽に出來ない事であるし、無理に實驗するから、甲の子供に猫を、乙の子供に犬を飼へと云ふ事の出來ない事であるが、多くさうした結果の方面から統計を集めて作れば面白い數字が出て來るかも知れない。

自分の膝の上に猫を置いて猫の脊をたえず軽くなでてゐるやうな人は必ず器用な人か、器用な素質を持つてゐる人である。それは自分の掌に猫の毛並の柔らかい少し暖かいあの觸覺を楽しんでゐる人である。さうしてこの猫の脊をなでる事が無上の楽しみになつて、愛猫家などになる人が、愛

猫家の何分かは必ずあるものと思つてゐる。

例の日光の眠り猫を作つたと云ふ左甚五郎もやはり私は愛猫家ではなかつたかと思ふ。仕事の暇に膝に猫を置いて靜かになでながら細かに猫を見てゐたものだと思ふ。兎に角あの時代の彫刻としては珍らしく寫實的なものであるし、猫の觀察もよく出來てゐる。又あの彫刻は猫を初めて彫つたものであると思はれない點もある。

あの猫は眠つてゐる猫の姿ではないのに、眼だけが閉ぢて眠つてゐる。それは猫を彫刻にする場合眼を開けたままであると、どうしても猫らしい感じが出ないので、多分甚五郎は、幾つも猫を彫り損つて、結局眼を閉ぢて眠つた顔にして猫の感じを出したのだと思ふ。ここまで猫を觀察して彫刻にかうして猫を表現してゐる點から考へれば左甚五郎は餘程猫と親しんで、細かに見てゐたであらうと思へるし、あの器用さの必要な彫刻をした手であるから、猫の毛並の柔らかさを楽しむだけの猫に觸覺の敏感さがあり、ゴツ／＼した荒仕事の大工の手では無かつたと思はれる。

將棋などをやつてゐると、相手が考へたりすると、その間待つのにちつとしてゐないで手に持つてゐる駒を握つて、両手の中でがちゃ／＼やつたり、左り手から右手へ、ガラ／＼と移すと、これ

を又右手から左手へガラ／＼とどす。これを何度もくりかへす癖もあれば、一つの駒を持つて、將棋盤の横の面をバチ／＼軽く打つたり、指先に二つ手持の駒を持つて打ち合せたりする。兎に角一方から見てゐると、無意識にやつてゐるには違ひないが、その音や手先の動き様子が如何にも屈託の無ささうな、楽しんでゐる様子である。併しきちんと座敷などに坐つて御隠居などとさしてゐる時にそんな事をやると、「落着きのない奴だ」と叱言位云はれるかも知れない。だがそれは御隠居に旗色のいい間は大丈夫だらうが、若し負かしたりすると、何か一言云はれるかも知れない。

火鉢などに火箸があると、頼まれもしないのに、火鉢の中の細いごみをはさんで集めて、一方の角に置いたり、細い炭のカケラは火の中に入れてたりして、灰の上を平にならしたり、それが終ると、今度は灰の上に圓や四角を書き始める。

それが無い時は火鉢を指で軽くたたいたり、指先でトン／＼トン調子をつけて打つたりする。これも御隠居などが居るやうなところでやれば嫌はれる事があるが、これは子供でなくても必ずある。さうしてどこか訪問して永く待たせられた時などは特別であるが、さうで無くても將棋の駒のガチガチに似てやつてゐる本人は楽しさうであり、だん／＼たたく高さに一種の調子がついて來たりする、こんな時には耳と一緒に楽しんでゐるのであらう。

かうした手先をじつとしてゐないで、いつも動かしてゐる人は、昔から動き好きだと云つてゐるが、かうした人は動き好きであるかも知れないが、器用である事も確かである。指先で何かを打つて音を樂しみ、指先を動かす事に依つて、退屈しない人は、この素質を引き出して、それを磨けば、寒玉翁は出來ないとしても、音楽家を志望出來る素質はあると云へる。それも指先を用ひる器樂の方がよい。聲樂ではその人の聲は天性でどうにもならないものであるが、器樂なら素質と努力で妙音が出ないとは云へない。

對談してゐると手をよく動かす人がある。又膝の上にきちんと置いて、親父の叱言でも神妙に聞いてゐるやうな人がある、こんな人は無表情で面白くない事が多い。普通の用件の話の時に手を動かさない人は不器用だ、これと反對に手を動かす人は器用な人が多い。

手はかうしている／＼口と同じやうにものを云ふ。併しこれを聞く人の耳に依つて又別な言葉を持つてゐる事が解らうが、私は私の仕事の耳で手の語る言葉を聞いたので、その語る一部のみしか掴んでゐない。

併し眼が口程にものを云ふのはかうした意味の言葉でなくて、もう少しその時、その場の感情を語る言葉であらうが、手にもそれがある。

例へば、若い美しい女の手を、若い男が食指の先で、チヨンと軽く突くと云ふやうな動作があるとする、併し二人は無言であつても、そこに言葉以上の言葉を語る事もあらう。

氣まづい對談の二人が座が白けて兩手を組んだりほぐしたりするやうな手先にも、その二人の間の氣持が語られてゐる事もあらう。

併しさう云ふ時でも器用な人の手の方が、不器用な人の手先よりも、雄辯ゆうべんに無言の言葉を表現することは確かである。(一五、五)

花の藝術

花瓶の話

花瓶と云ふと、一つの器に花を活けて、花とその器との調和がシツクリ行かねばならない。自然花を活けると云ふ目的になつた器でなければならぬ。ところが一面から考へると店頭その他にある所謂工藝品を見ると、何れもが花を考へずに單に器そのもので見せやうとする傾向があるのである。であるからかうしたものは花瓶としてではなく、單に壺とか器として見るより仕方がない。なぜかうしたものが多いかと云ふと、花瓶を造る人が花を活けて觀賞すると云ふ考へがなく、たゞ立派な器を造らうと努力するからである。つまり造る人が花を活けることと、器を作ると云ふ總合された趣味性と云ふか環境と云ふかさうしたことが不足してゐるからである。花を活けて樂しむと云ふ趣味が乏しくて、たゞ花瓶を造つて花瓶そのものの美しさとか恰好とかを考へてゐるからである。

であるから出來上つた花瓶に花を活けて見ると、大抵のものは口が小さくて具合が悪いのである。

花瓶としてどうしても口の大きいと云ふことが必要である。それは口が大きいと花がタップリ活けられて非常に美しく見えるからである。ところが、花瓶を造る人から云はせると口が大きくては物足らないので自然に口を細くして仕舞ふ。この意味からどうしても工人は花を取扱ふことが必要である。

例へば植木鉢にしても支那鉢が非常に秀れてゐると云ふのは——勿論日本でも技術が進んでゐるので却々よいものが出來るが——それに植物を植ゑて見ると支那鉢の方が遙かに調和がよいからである。これは昔鉢を作つた支那人達が植木と云ふものを自分でよく研究し、それが一つの形式として残されたから、今日我々が植木を之に植ゑて見ると實際によく調和がとれるのである。植ゑると直ぐにそこに調和が生れる、と云ふやうにならなければ本當の鉢とは云へないと思ふ。

花瓶にあつても此の植木鉢の場合と同様であつて、造る人が今少し實際に花を扱ふことが目下の急務であると思ふ。私は廣く花瓶に對しては注意をしてゐるが、未だに花瓶として花を活けても之はいいなアと云ふ様なものは殆んど見てゐない。

そこに行くと、感心するのは種々の形に造られた竹籠である。勿論多くの中には商品中心にやる

人もあるが、工藝の展覽會等があつても、それに花を活けてチャンと並べたものがあり、それが實に氣が効いてゐるのである。文展等で陶器も鑄物も何もかも花瓶をネラつてゐるが、さて我々がそれに花を活けようと考へて見ると、どうも思はしくないものばかりである。それは結局花に對する研究が足りないからである。であるからかういふことが云へる。即ち花の方から行くと工人の花を活ける目的で拵へたものよりは、水を入れる目的で造つた甕等の方が口が廣く花を活ける器としてあつらへ向のものが多いと云ふことである。或は往時武士が戰場で使用した馬盥とか——之は花を活ける目的で造つたものではないが——將又釣瓶等に活けた方が趣味があると云ふことになるのである。

流儀の花は器に束縛があつて——池之坊では好みの器が使用されるが——花瓶に不調和がある。却つて竹の根とかヅンドウに深い興味があるやうである。茶壺は花を活ける目的のものではないが、口が廣くないので面白くないが、口が小さくても肩の張つてゐるものは一寸面白く見られるのである。徳利の様な形のものでは問題でない。

花瓶には花の模様とか込入つた色彩の施されたものは好ましくない。滋味のあるものが最上であ

る。花には必ず葉が添へられる。葉は何れも緑であるから、花瓶には此の葉の綠色に邪魔にならない色彩を使用するのがよいと思ふ。どちらかと云へば落着いた色のものがよい。であるから花瓶の色彩としては青滋等はなるべく避けるやうにし——之は葉の色を汚く見せる——茶色とか黒とか大體に黒ずんだ色、つまり綠色の引立つ色の花瓶ならばきつと全體の調和が和かであり、我々に満足を與へるものである。

花を活けると云ふことは、その花の種類と木振りと器との調和を先づ見當立てることである。之に失敗があつたら活花はもう失敗であると云つてもよい。花をいぢる人が花が綺麗であると云ふので、器に無頓着であつてはならない。花を見る場合には花と同時に活ける器と云ふことを考へるものである。つまり家庭で庭前に作つた花であつても、花屋で賣つてゐる花である場合でも、先づ之の花を活けようと考へた場合には、花を選ぶと同時に器のことを考へる必要がある。そして花と器とが實にうまく調和がとれると云ふものでなければならぬ。たゞ花を買つて來た、活けて見ようと云ふのでは快心の作は見られないものである。即ち器に依つて大概のものなら納るものもあるし、又何んでなければ活けても引立たないと云ふものもある。どちらかと云へば大概のものが納る器と

云ふものが一番よいわけである。

以上の事柄から考へると我々が一寸挿してもうつりのよいのは竹籠であり、次は焼物である。金
のものは花が面白く見えない缺點がある。焼物であつても、一番花を貴品高く見せ、具合のよいの
は行基焼、備前、丹波、信樂等のくすんだものである。南蠻系統のもの呂宋のものもよい。私の持
つてゐるサラワークの壺は一見黄交趾などと云ふ風な南蠻系の壺で、色彩から云へば花は何にでも
調和するが、少し長いだけに懸崖風なものが一番いいやうだ。

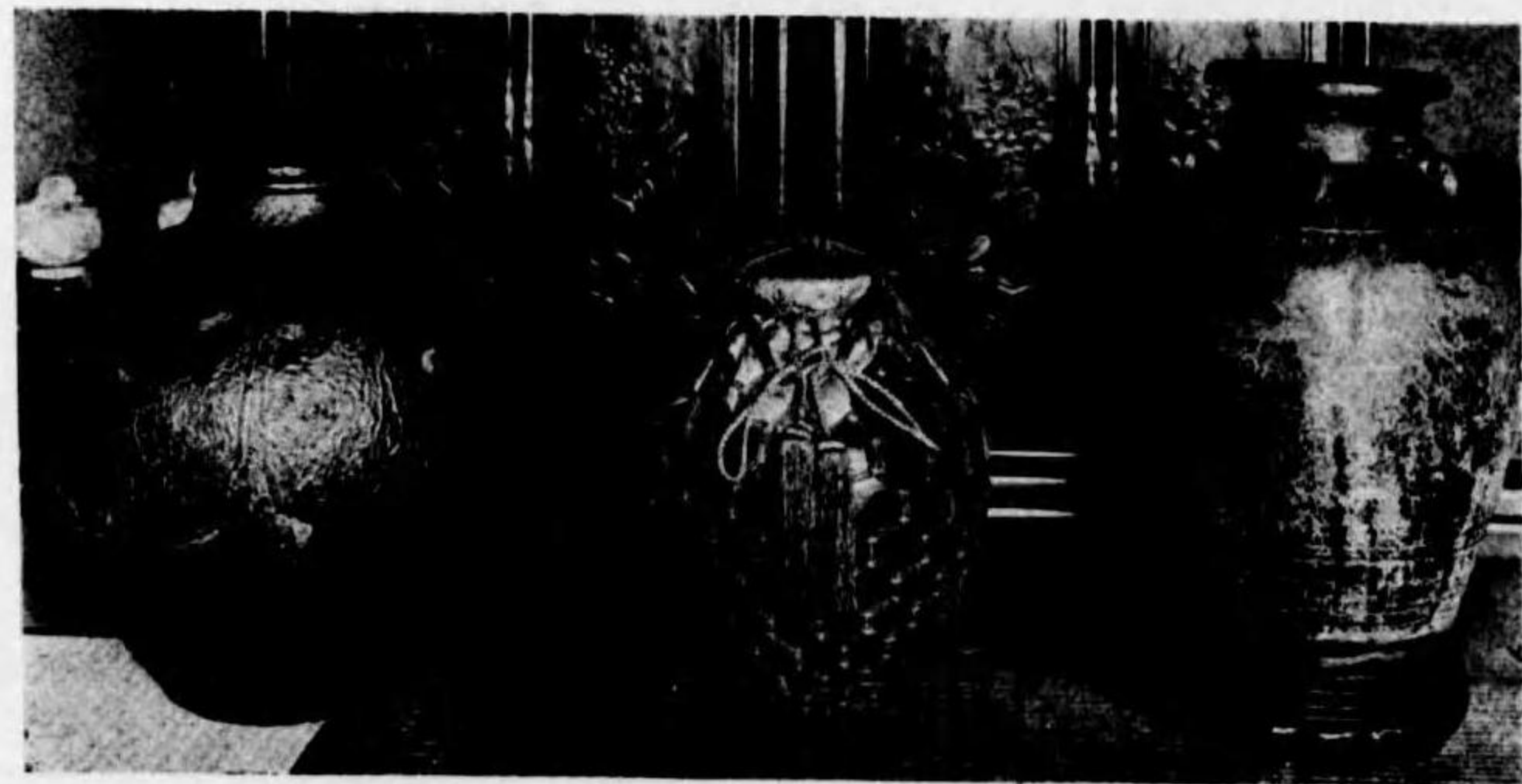
色彩の地味なかうした壺にはどんな花を持つて來ても調和するが色彩のある壺になると、その色
彩と調和する。それから強い花でない調和しないやうだ。李朝の壺は鐵で何にか模様がやつてあ
るのが多いが、これは、梅など入れても花が負けてしまふけれど、大まかな西洋花卉なら調和する。
これらもつと色彩が豊富な壺だと反對に花はだんだん数が少なくなつて強い色彩の花だけがこれに
調和する事になる。

形から云ふと、直線の勝つた壺には眞の形が、曲線の多い壺には行の形が調和する、さうしても
つと、曲線が強くなつて行くと、草の形の花が調和して來る。これは大體の形から云つた事で、そ

壺



(尺ニサ高) 燒 基 行



斗火摩薩

壺ンスル

壺イナルブ

の場合によつては相異はあるのである。

私の持つてゐる花器くわきでは花瓶として初から焼かれたものより、水瓶に作つたものに花の活け易いものが多いのは一寸皮肉だ。(一三、二)

が ら す 譚

美しく澄んだ水のやうに、それを通して物を眺められるものがあればと云ふ願望は、餘程古い我々の祖先も懐いて居たに違ひない。今でも少し光線の足りない部屋などであると、ガラス窓ならと思ふ事があるくらゐである。根岸に病んで病床で仕事を續けた子規の當時の歌にも、ガラス戸越に上野の森を眺めてそれで仕事に疲れた無聊な病床生活を慰められたやうなものが残つてゐる。

現代では一ツ十錢のインクも一ツ五錢の糊もガラス瓶に入つてゐるが、今から凡そ三百五十年程前、秀吉が自分の湯殿に方一寸のぎやまんの窓と云ふより、のぞき穴を作つて派手好きの秀吉は満足を感じてゐたと云ふ話がある。これが徳川時代に入つて三代將軍家光が柳生の殿様を諸國隱密行脚に出して無事任務を果たしたと云ふので、賞として四方だつたかにぎやまんの小窓のある茶室を賜つたと云ふ話がある。この頃になると、ガラスも茶室の小さいながらも外がのぞかれる位の窓を作るやうになつたのだから幾分その所有者も多くなつたものだらうが、この茶室のガラスは何千石か

に價ひするものであつた事は事實であらう。

多分こんな時代であつたらう、大分にさんやと云ふ豪商が居て、これが夏自分の領主を自宅にまねいて、いろ／＼雑談をしてゐたのだつた。それが普通の商人と領主との關係ならなかなか雑談など出来ない間であるが、このさんやは多分この領主のための弗箱であつたらう。さうしてその夏の訪問も金の相談であつたかも知れない。二人は座敷に寝ころんで、天井を見ながら話をしてゐた。その天井と云ふのが當時としては珍らしくガラスで一部出来てゐて、それに水を入れて金魚を泳がせてゐたのである。さうしてあの金魚、この金魚と云つて説明してゐる間に、さんやの主人が足先で一尾の金魚を指した。ところが領主を怒らせてと／＼さんや一家は全部引かれて行つて亡びてしまつた。領主との金談がうまくまとまらなかつたためだつたかも知れないが、ガラス天井を作りその上に金魚を泳がせると云ふ事は、當時としては全く一國の小大名などの及ぶ事ではなかつた贅の限りであつたであらう。百軒長屋の軒先にもガラス製の金魚玉がぶらさけてある現在からは考へ及ばぬさうした時代もあつた。

併しさうしたものは今は残されてゐるのでも無く、語り傳へられてゐるにすぎない話であるが、今から約二百年前の清の乾隆時代のガラス工藝品には非常に立派なものが残されてゐる。二百年位

前と云へば徳川幕府は田沼意次たぬまおきつぐが出たり、さつまいもで有名な青木昆陽が出たりした時代だ。又アメリカと云ふ國も獨立戦争を始めたばかり、現在の合衆國が出来るか出来ないか、それすら考へられない時であつた。さうした時代に清では乾隆ガラスと呼ばれて珍重ちんちょうされる立派な工藝品を製作してゐた。

それは白いガラスの上に赤とか緑とか青とかの色のガラスを一面に掛けて、それを彫つていろいろの模様を出したものである。素地そぢになるガラスは白ばかりで無く黄色もあれば、やや透明とろみのものもある。又白とか黄の素地の上に赤とか桃色を一度掛け、又その上に緑とか青とかを掛けて、彫つて模様を出し、この三色を生かしてゐるものなどある。又一色の青とか黄とかに模様を彫つたものがある。

その彫り方に薄肉彫刻うすにくてうけのやうに彫つたのもあれば、表面の高さをそのまま、素地に直角に彫り込んで、そのまま一つの圖案を生かしてゐるものもある。

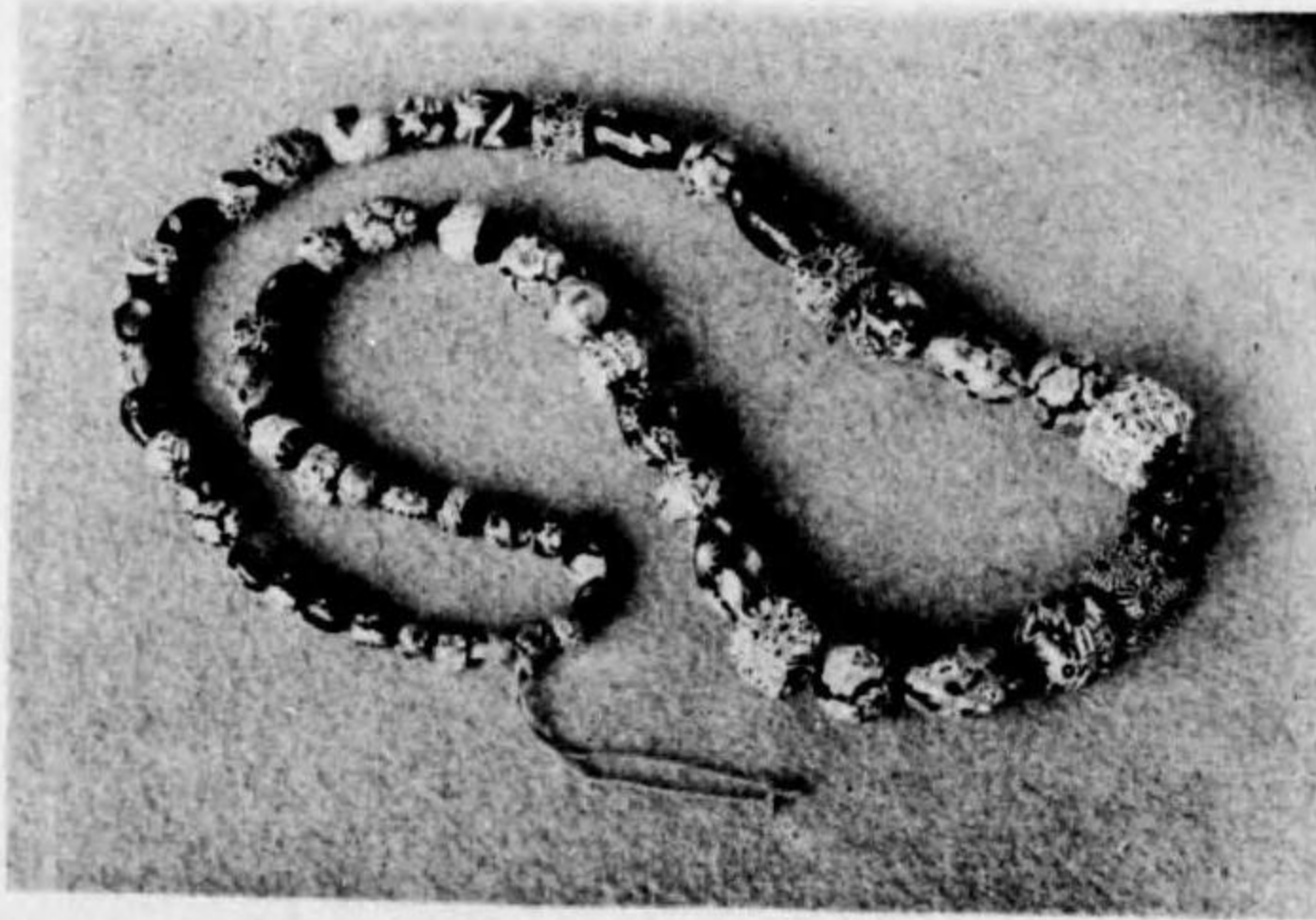
皿とか井なども模様を彫ると同時にその形を彫つて磨いたり、いとどこを彫つて磨いて半透明はんとうめいのやうにしたものなどがある。これが少し古い時代に入ると、壺などは一つのガラスの素材のかたまりからその形を作り、中を掘つて壺にしたものなどがある。



スラガ隆乾



スラガ隆乾



子切環遊薩乾
爐香スラガ



玉スラガの代時隆乾

ガラス八題(一)

この模様を彫る事は現代のカットガラスの工程では出来ないもので、一つ一つ手の先で小さな穴を澤山作り、それに依つて少しづつ彫つて作つたものであらうと思はれる。私の壺にもさうして作つた時に出来た穴の残つてゐるものがある。この素地の面に上に掛けた色を直角に彫つて行く事は非常に現代の工程では出来難いし又、小さな曲線もむつかしい。それをやつてゐるから、一つ一つ穴を針の先のやうなもので掘つて、永い時間を費して製作したものであらう。このガラスの硬度は現代のガラスより多少低いと云ふ事である。又このガラスの中には製作する時にガラスの材料と共に寶石を溶しこんだものであると云ふ事である。

ヴェニス玉と云ふ伊太利のヴェニスで製造してゐる玉がある。これはビール瓶のかけらのやうなものを中心にしてそれに色ガラスの細かなものをつけて溶して固めたものである。それと似たものが乾隆ガラスにもあり、製法は似てゐるやうであるが、この方には正しく模様が花の形であつたり、星の形をしてゐるものである。これがどうして製られた模様か、私も今までに満足な解答を聞いてゐない。

徳川の末期に入つて日本でもガラスの工藝品が出て來た。さうして残されてゐるものにはなかなか立派なものがあつて薩摩切子と云つてなかくいいガラスの質のものに所謂切子がしてあるので



スラガ摩薩



スラガ隆乾



アツコのスラガヤミヘボ

子切戸江



ガラス八題(二)

ある。透明のもの、紫のもの赤いもの、又支那ガラスのやうに透明ガラスの上に赤や紫の色ガラスを掛けて切子にしたものがある。これは島津家でやつたもので、島津侯が江戸へ上られる時にはこのガラス器を各方面にお土産にされたものである。

さうした島津家に依つて残された工藝品の中には決して現代の歐米の作品に負けないものがある。色も後には焼きつけたものもある。これが中絶せず今まで續いてゐたらボヘミヤガラスだとかベルギーなどに負けないものを出してゐたと思はれる。

薩摩より素地は少し悪くなるが、技巧は切子として少し上等なのに江戸切子がある。これには曲線を多く入れた模様があるものが多い。やはり技巧だけは都會で磨いた腕であるが、素材だけはどうにもならなかつたものだらう。後にこの技巧が薩摩に行つて、薩摩切子に江戸と薩摩の技巧が一つの器物の中に溶和してゐるものなどが出来てゐる。

これが明治の文明開化の聲に消されて江戸ガラスの職人が夜店でランプの商人になつてホヤなどに模様や名前を彫つたりして残つてゐたがそれも無くなつた。日本のガラス工藝は昭和になつてから再び歐米から入つて来たものが、ガラスの持つ美と日本の手先の器用さによつてなか／＼いいドラザイル、ガラスなど見られるやうになつた。

この他に日本で福島の須賀川からガラスが出た。これはその近くでガラスの材料が出たからではないかと思ふ。多く今に残されてゐるものは紫色の徳利で、丸形や四角なのが多く、少し上等のものでも金の焼付模様がある程度である。

早くこの方面のガラスの材料と江戸の技巧とが結び合つてゐたら、面白いものを残してゐて呉れたらうと、釣り損じた魚を數へるやうな事ではあるが思はれる事である。(一五、八)

私の生花

恐らく花を嫌ひな人はなからう。然しその愛好の程度に差異のあるのは、好きなものを好きなやうに其環境がしてくれぬか、してくれぬかに依つて定まるが、今一つ環境がさうでなくとも自分で作る程花に對する趣味を持つ人がある。幸に私は花に對しては至つて自由であつた。丁度十一、二歳の頃非常に氣むづかしい合澤と云ふ義兄があつたが、その氣むづかしい加減は想像以上で、よく世間で子供が餘り泣くと「お巡りさんが来る」と云つて威すが、私の近所ではお巡りさんの代りに「合澤先生が来るぞ」と云つて子供を威した程怖い義兄であつた。其處に私は子供の時分一緒に居つたが、この非常に怖い義兄は不器用であつたが花を活けることが大變好きだつたのである。そんな關係から近くに古流から出た宏道流の宗匠が居られたので、姉を初め私と近所の人達が十人位集つて教へを受け時々生花の會を開いたが、何時も私は卷（天・地・人に選ばれ、天位の者が貰ふ巻物）を取つたものである。

何故私の様な子供が卷を取ることが出きたかと云ふと、生花に用ひる材料を山等に採集に行くのが私自身であつたので、山に行つた時に自分で活けるものの段取を定め取つて來、他の人には拙づいものではないが自分から見えて氣に入らないものを分けると云ふやうにしてゐた。つまり私の活けるものは自分の一番氣に入つたもので、然も山に行つた時に既に一の枝、二の枝三の枝がキチンと揃つてゐるものを撰んで置くのであるから、當然卷を取ることが出來たのであると思ふ。然しかうして生花を習つてゐる間に自然に自分は卷を貰ふのがあたりまへであると思ふ。更にこれでは本當の生花の行き方ではない。花を活けるのは拙づいものを立派に活けるのが本當であり、出來る丈幾本も寄せ合せて花の形を作るべきであると思ふ、それから後は私の生花は技術化して行つたのである。然し一並び二並び等と云つてコミに一杯になる様に活けても矢張り卷を貰ふ事には變りなかつた。

ところが他の流儀のものを書物等で見るといろいろ枝の曲げ方があり非常に技術的であることを知つたが、中でも遠州流に最も興味を持ち、早速遠州流に入つて木を撓めることを覺えたのである。その後東京に出て（二十五、六歳頃）當時都古流の先生として有名であつた磯貝一船先生の下に教

へを受けたが、その流儀は枝のコロは池の坊、花形が古流、止めが遠州流であつた。それは先生が花屋であられた時いろ／＼な花を扱つてゐられる間に自然に會得されたものであらうと思ふ。先生に就いて二、三年稽古をしてお許しを貰つてゐる。磯貝先生のうまい事は大きいものを非常に取り入れられることで時には一間位の花を活けられたものである。更に先生は我我に教へる場合にしても裏からキチンと活けて行かれたことで、これは花を立體的に知つて居られた爲であらう。流石は都古流と云ふ一派を編み出されただけに凡人とは違つた素質を持つてゐられたらしく、これ程上手な先生は一寸見當らないやうである。私は方々の生花の會に連れられて行つたが淺草の傳法院等へ再三行つたことを記憶してゐる。此の先生を私は屢々ビツクリさせる様な技巧的な活け方をした事があるが、それは生花の技術的の面白味で、生花を靜かに味ふ事にはならずやがて倦きの來るものである。

生花と私はこんな關係があつたが、現在私は花を活ける場合は勝手次第に活け、臨機應變に活けてゐるのである。何れにせよ花を活ける場合は床間にしても、一寸した洋館でも或は机の前、窓際等凡て器と花と置場所の三つの調和さへ完全であればよいと思ふ。一本の枝でも今迄は成べく缺を

入れて無駄のない様に苦心したものであるが、今は缺を入れずありのままに活けるやうにしてゐる。それで花でも枝でも、自然にどう云ふ風に伸びてゐるか又は咲いてゐるかを知るには、一本の枝を眞直に持ち之を廻しながら眺め、それから斜にして又廻して見ると、その枝が自然にあつた位置と必ず同じになる場合が一ヶ處ある筈である。又ものにより一本枝でそれを反對に持つて行つてよい場合もある。又二つ以上あるものもある。梅等は反對にやつてもよく收るものでその點一番自由であらう。

花を活ける場合に私は水に全部をトツブリ漬けるのが好きである。何故かと云ふとかうして活けたものは生氣潑刺としてゐるからである。決して現在でも流儀の花を嫌ふものではないが、所謂眺める花では面白くない、かうした花には生氣潑刺と云ふ感じが無いからである。

流儀の花を活けるとその花の性能を知ることが出来る。それはどう云ふ風に活けやうかといぢくり廻してゐる間に花の特性を自然と知る様になるのであつて、これが分らなければ活けることは出来ないと云つてよい。即ち流儀の花は花を活ける基礎を作るには非常に結構なものであるが、花道の最高であるとは云へない。一本の花、一本の枝でも花にならぬことは決してなく、佛様の花でも生花の層で立派に出来るのである。

三月には桃が澤山使はれるが、桃を花店から買った場合皆縛つてあるがそれをいろ／＼いぢつて活けたのでは何等風情のないものである。が、然し桃にたつた一つの風情のあることがある。それは根元の縛つてある部分を解かずに、上部の縛つてある部分だけを缺で繩を切つて、縛られてゐる枝を元に戻して活けるのである。花尾では何百何千と云ふ數を拵へるのであるが、永年の習慣で拵へてゐる中に自然に技術が現れてチャント纏めてあるものである。であるからそれを其儘調和する器に活けると、云ふに云はれぬ趣が見られる。花束を手にした場合それを拵へるのにどれ丈の技術があつたかを必ず見るやうにすると、我々は教へられる多くのものを見出すのである。

生花でも藝術でも「技神に入る」と云ふことがあるが、花を活けて之を眺める時去ることの出来ぬ程「技神に入る」のは練習ではない。人間には神経があるが、これは知識や意識だけではない。神経とは神の經（たていと）と云ふことで、人間が神の意を傳へる一つの器官であると思ふ。であるから花を活ける場合も常に神経を働かす必要があらう、神経は決して偽りを教へるものではない。然るに人間は多くの場合神経を壓迫して居り而も近代の科學文明は神経を萎縮させてゐるのであ

る。であるから花を活ける場合は此の神経を呼び起した神経が花を活けるのであると思はねばならぬ。従つて神経が活けたものは神の意識の現れであると云つてよいわけである。例へば今此處に一つの大菊を活けてある場合、やがては葉は枯れるが花だけは残る。こんな時普通なれば枯れたと云ふので直ぐ捨ててしまふが、捨てると云ふことは人間の考へで神の考へでない。つまり人間の神経は捨てるのは惜しいと思ふのである。故に葉が枯れたからと云つて捨てず、その枯れた菊の風情を味ふと云ふ事になる。それには小菊の青々としたものを下の止めに活けると云ふやうにすれば晩秋から冬にかけての寒菊の風情を充分味へるのである。「枯れたものを生かす」これこそ花を活ける最大な楽しみであらう。

又木の枝等によく見る處であるが、植替された爲に元は北向にあつたものが南向になつた場合等、葉がヒネクテゐる。それを生花として用ひる時は置場所を考へると非常に役立つもので、例へば窓等に活け、窓を少し開けて置くと、何時もその窓から風が少しづつ吹込んでゐると云ふ風情を現すことが出来、然も二、三枚の葉を下に落して置くのも興趣を一段と深めることになるし、夏であれば非常に涼味を覚えさせることにならう。

生花ではその時期（季節）のものを活けると云ふのが原則であるが、近頃の様には温室栽培や促成栽培が盛んになり、然も西洋草花が多いから、季節に捉はれることの出来ない場合がある。それで私は季節は傳統として現さねばならない時は新しい活け方はよくないが、その他の場合は一切差支ないと思つてゐる。却つて夏暑い時に冬の感じを出すのも面白いだらう。

とに角生花は生氣潑刺としてゐることが何時の場合でも必要で、菜の花でも春の感じを與へ芽の伸びて行く思ひを懷せれば充分なものである常に生きて行くと云ふ感じが生花になくはならないと思ふ。その故か以前は造花に對する活花と云つたが、現在では更に進んで生花となつて來てゐるのである。自分の神經に合ふ様に無中で活けて一本の枝を毎日かへて行く趣味、此の點は流儀の花に見られぬ投入の妙味であらう。

茶は客を對象としたものであり、生花もさうであるが、茶は一人で楽しみないのに反し、生花は一人で落着いて楽しむことが出来る。一人で楽しむことは家族を楽しめ、又客を楽しませる。此の點が私に花を弄ばさせるのである。

毎年上野の美術館とかその他で繪や彫刻の展覽會が催されるが、私は自分の關係してゐるものと

か自分でやる會以外は行つて見たことがない。然るに盆栽とか生花の會にはどんな場合でも大抵見に行くことにしてゐる。それは一人でユツクリ楽しむことが出来るからである。更に今一つの理由は、最近ナチスが云つた言葉に「ドイツでは藝術の批判を許さず觀賞を許す」と云ふのがあるが實に面白いと思ふ。日本の現在の状態は餘りに批判的であると思ふ。藝術を批判的に行くのは藝術の目的に反することである。であるから批判しなくてはならない氣持にある時には絶對に見ないことにし、そして觀賞すると云ふものだけを見るやうに努めてゐる。(一一、三)

正月の活花と梅

蔦の紅葉も終つて、槭樹も散つて、落霜紅の實が紅くいよ／＼芽えて来る。このころになると枝幹の美しい落葉樹の盆栽の雅致が眺められる。併しさうした落葉樹の中に何んとかなく枝に樹木の生命が流動してゐるなど感ぜられるのが梅だ。もうこのごろに梅の枝は早春に咲き出す花の用意をして居るのだ。

小春日の陽に昔が少しづつ太つて行く、こんなのを眺めてゐると、年が暮れて行くといふ匆忙の間に、あわたゞしい感じてなく、新らしい年を迎へるといふ。新春の陽氣を直に思はせるものがある。他の落葉樹の枝には何となく寒い風に吹きさらされるための用意があるやうな感じがするが、梅にはない。さうして下植が福壽草でもあればなほ新春の陽氣を思はせる。

もう何日で正月が来ると、子供が指を折り始めるころにはこの梅の昔は花の色が見える位に膨らんで来てゐる、そのころになると、私も正月の活花を今年は何杯入れるかを數へてみたりする。さ

うして、その花器を今年はどれにするかを考へたりする。もうこのごろになると私には年内に残された、これが最も大きい仕事のやうに思はれる。二十五、六日ごろになると花屋に出掛けて行つて十五杯位入れられるだけの花を求めて来る。この花の八割位までが梅である、これを二十年近くも續けてゐる。さうしてどの部屋にもどの床にも梅が入られる、さうしてどれにも殆ど萬兩か春蘭が添へられる。

正月の花には、青々とした男性的な勇壯な松もある、品のいゝ年増のやうな水仙もある、若い娘の盛装したやうな寒牡丹もある、併し梅位の私は好きな正月の花はない。

梅の木振りは面白く雅致がある。あのボク／＼とした苔のあるさびのある幹によく調和する形のない花の香氣は部屋中に、名香を焚いた以上に好ましく匂つて呉れる、それがまた何んともいへぬ優美なものだ。

それに萬兩を添へる、この萬兩は梅の持つてゐないものを持つてゐる、青々とした光つた廣い葉に紅一點ともいひたい紅い實がついてゐる、この萬兩の青い葉と赤い實と梅とがあつて、花の殆どの色彩を代表してゐるやうなものであり、それに春蘭を入れると、梅にも萬兩にも無い曲勢の美を加へる。

(一) まぎまさの花活



花活の月正
壺の代時漢は器花



物置の龜と花活の月正
波丹古は壺



花活の月正
器土鮮朝は器花



花活の月正
燒基行は器花

梅が百花に魁^{さきがけ}けて早春の氣分の落ちついた時に咲き出すといふやうな點にも正月の花としての意味があるのではなからうか。梅は盆栽^{ぼんさい}として養つても非常に長壽なものださうで、尤に二百年位は持ち込めるといふことだから、縁起^{えんぎ}を好む正月だけに、梅が非常に長壽といふことを聞いても何んとなく正月の花といふ感がする。

十二月も、もう二日で終るといふ三十日には、暖かいアトリエに幾つも花器を並べて、花を運んで、これは何處、これは彼處と入れて行く、そのどれにも梅が入つてゐる、それ程私は梅が好きだ。さうして活花にすると梅程花器^{くわき}に癖^{くせ}がありさうで癖^{くせ}がなくよく調和するものは餘りない。古い朝鮮の燒物^{やきもの}にも、行基^{ぎんぎ}燒、古丹波^{こたんば}、朝霧^{あさぎり}燒、などの濫^{らん}いものから、籠^{かご}にも銅器^{どうき}にも、ガラスにも、三彩^{さんさい}とか、丸谷^{まるたに}とか南京赤畫^{ナンキンせきかくわ}などのやうなものにもうつる。梅の枝があゝしたゴツ／＼した感じの木でありながら撓^{かた}めるのにとても氣持よく撓^{かた}められる。指先でピシ／＼と枝を曲げればそれで出來て行くその撓^{かた}められ振りが實によく、また撓^{かた}めて氣持のいいものだ。澤山の花の中でこの位の點氣持のさつぱりしたものはなからう。

枝を主としてよし、木を主としてよく、花を主としてもよい。その行くとして可ならざるところなしといふ程その用ひ方に奥行を持つてゐる。また添^まへの方^{まへ}を萬兩^{まんりやう}を取り去つて春蘭^{しゅんらん}にしても、寒^{かえ}

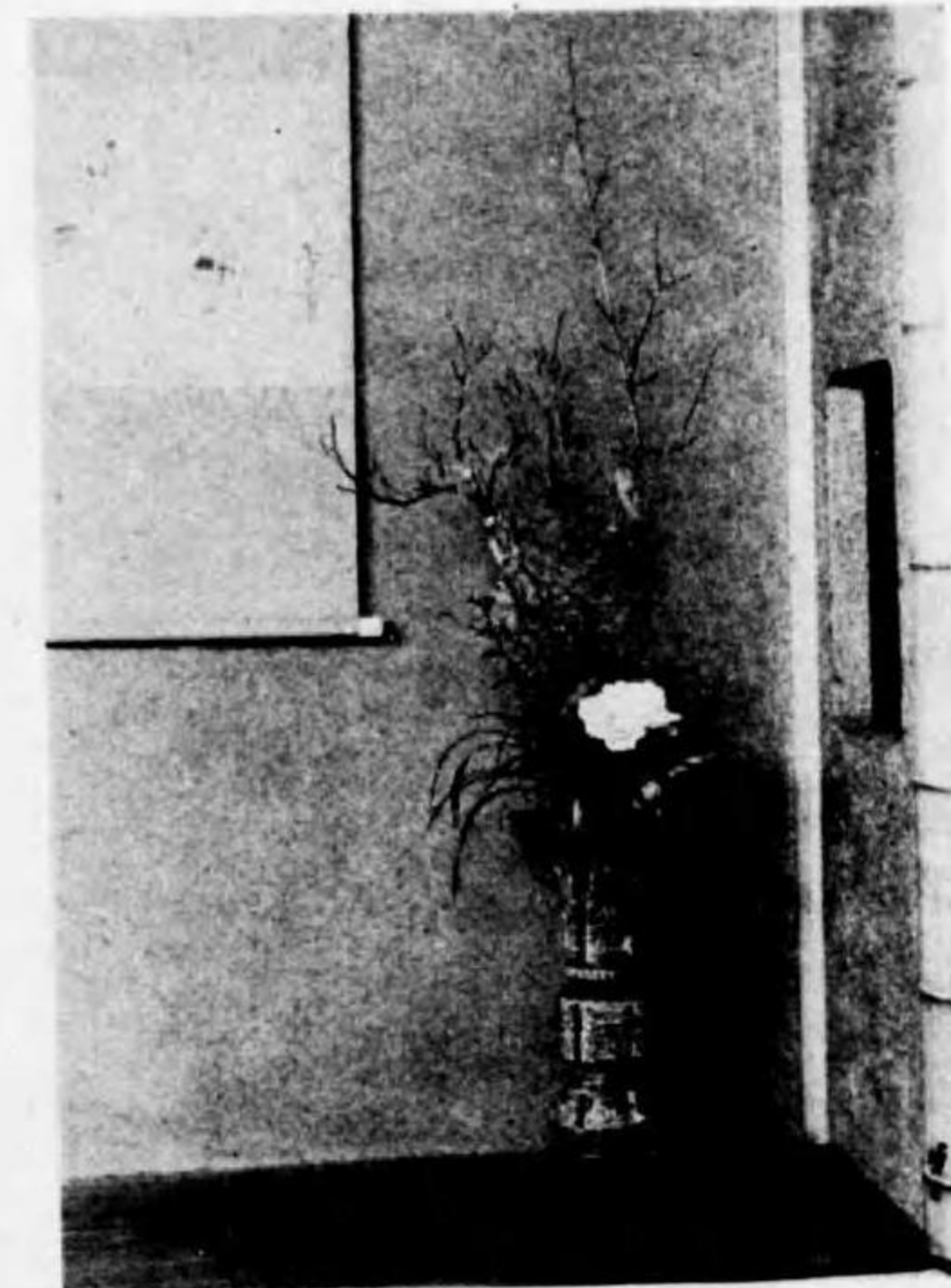
牡丹にしても、水仙にしても、貝母にしても、よく調和する、かうした巾の廣さを持つてゐる。かうした特徴を持つた活花の花は餘りなからう。

私はかうした梅の特徴を愛すると共に梅に對しては子供のころから親しみと懐しみを持つてゐる。それは、山梨縣の絹が甲斐絹で東京で通る、陶器の瀬戸、唐津、結城紬を紬といへば何處でも通るやうに、大分の梅は豊後梅の名で何處でも通る。かうした生産した國の名を冠した呼ばれるほど豊後梅には特徴があつて、三徳梅と呼ばれて、花よし、實よし、香よしで、さうした梅を少年時代から見ても私は梅に非常な愛着と懐しみを持つてゐるので、支那や日本の近代から古代の梅の畫は殆ど見た。さうして自分でも十五年間も梅ばかり書き續けて來た。併し私の畫は第三者のない畫で、決して人に見せるためなどに始めたのではなかつた。只自分で書いて味はつてゐるだけである。暇があれば筆を運び、氣分が乗るまゝに筆を執るのである。(二二、一)

(二) まさまさの花活



花活の春新
齋古尙は籠



床の月正



花活の夏
スラガ摩薩紫は器花



花活の間洋
朝李は器花

植 木 鉢

植木鉢を藝術的に見ると云ふことは、つまり實際から離れて植木鉢を論じなければならぬことになるが、然し私は實際から離れて植木鉢を云々することは出来ないと思ふ。工藝もそれと同様で實用を離れたのでは工藝價值がないことになる。

例へば、現在茶器等の中に名器と云はれるものは、實際には決して使用されてゐない。實用から遙かに遠ざかつてゐる。勿論最初は使はれたものに相違ないのであらうが、例へば、秀吉の愛用したものであるとか、或は信長の使つたといふものとか、大抵のものは何か因縁を持つてゐる。それがズット今日迄保存されて來て、名器の名がつけられ、更に今後も少しも使用されずに保存されて行くこととせう。であるからかうしたものの價值即ち歴史的價值と云ふのは長年そのまゝに保存されたと云ふ點にあるもので、決して工藝そのものゝ價值ではない。

その意味から植木鉢に就いて考へて見ると、植木を植ゑない單に鉢として良いと云ふのでは、所

謂骨董的な價值である。植木を考へて造つた鉢であれば、それこそ本當の植木鉢と云ふことが出來やう、かうしたことから鉢と云ふものに就いて考へて見ると、チャンとそれに調和してゐる植木を中に入れてピッタリするものでなければならぬが、然し事實に於てはなかなかそのやうなものがないやうに思はれる。

すべての工藝は決して實用を離れない實用に適切であることが工藝美の生れるところである。問題がつきまとつて來る。これは、材料や目的それだけのものを拵へると云ふ努力やその他いろんなものがかかつて來る。繪である材料は一枚の紙であり、繪具であるが、それを描く人によつて、只でも嫌になつてしまふ。つまり拙い繪には一向に心が惹かれないが、佳い繪であれば一枚でも何萬金と云ふ大金を出す氣になる。然し工藝には決してこのやうなことがない。従つて巧拙による少差はあつても努力(賃銀)と云ふものが定つて來るわけだ。

更に植木鉢は植木を積込む他に觀賞にも良く、栽培にも良いと云ふことが條件である。然しこれまでの陶工は鉢そのものゝ藝術的價值と云ふ點から「栽培にも良い」と云ふことが無關係なこと考へ、本當の藝術はそれを考へる必要がないと思つたのでせう。だが、植木鉢と云ふものは實

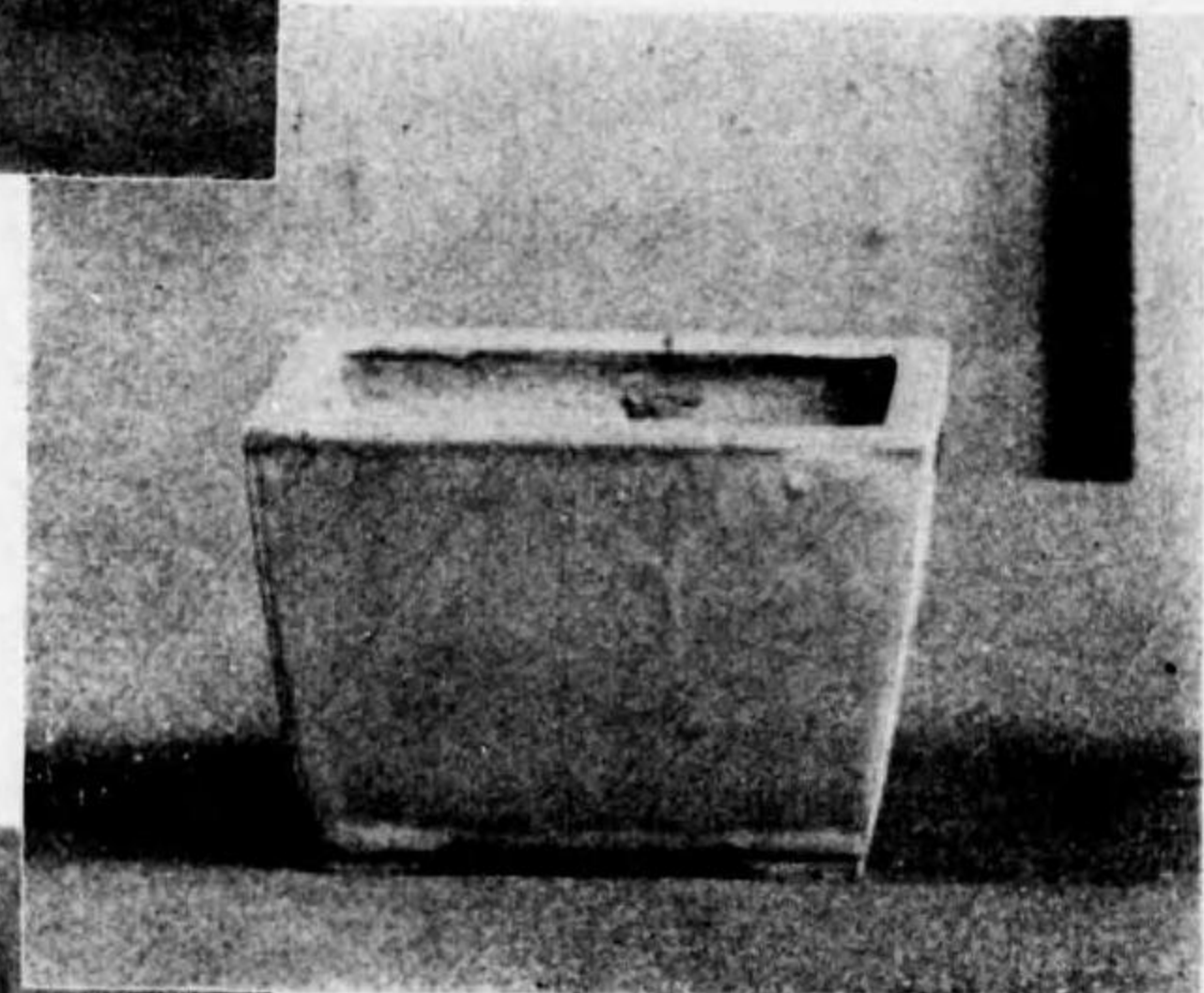
鉢 木 植



園 樂 借 州 紀



焼 摩 薩



趾 交 青



繪 赤 京 南

用を主とするものである以上その理想とするところは栽培にも、観賞にも適するものでなければならぬ。つまり日本の焼物は単に焼物そのものを「美」にしようとすることに腐心してゐた。大陸から焼物の技法が傳へられて來たのであるから、焼物そのものが先づ立派に出來ることに努力し、兎も角も出來上つたそのものは立派なものだが、今日となつて實用上から見るといろいろ具合の悪いものが多い。この點から考へると、さすが支那の焼物は非常に實用に具合がよい。例へば蘭鉢である、蘭の栽培を研究されたのである、つまり鉢を造る人が栽培と云ふことを目的として常に考へてゐて、それに適したものを造るやうに心掛けてゐるもので、その形式が今日迄傳つて來てゐる。焼物そのものに就いて見ると、日本の方が遙かに上手で、支那で出來るものは必ず日本でも出來るが、日本人は本當の植木鉢としての研究が足りない。結局似て非なるものが出來上つてしまふ。事實日本では焼く人が實際に植木を作らないからである。

茶器を造る人はそれを焼く人も又詩繪を描く人も、共に茶道を知つて居らなければ、眞實に良いものが出來ないのと同じやうに、植木鉢を造る人は矢張り植木を作る心得がなくてはならない。例へば大體このやうな松を植ゑるにはかう云ふ鉢を、又瀟洒なものを植ゑるにはかう云ふ鉢、或は同じ懸崖であつてもその枝振りを考へ、更に直幹のものにはどんな鉢を、双幹のものにはかう云ふ鉢が宜

しいだらう、と云ふやうに植木を先づ考へて鉢を造ると云ふやうでなければならぬと思ふ。それで今後植木鉢を進歩させるには、鉢を進めるよりは實際を知ることが必要であることは、私が此處に云ふまでもない明なる事實である。

私達は栽培上からと形の上から、此の兩方を兼ねた形と云ふと、一體に上の開いてゐる鉢、中で土が木や草の根が張つても、張れば張る程上に浮いて出るものが一番良いと思ふ。

而し形の上から安定を缺くと云ふ缺點があり勝だが、そこでかうしたことから考へると、二重鉢が考案されたら理想的だと思ふ。つまり栽培用の鉢を拵へ、それを觀賞用の立派な鉢に入ると云ふやうにしたらよからうと思ふ。

栽培する人がいろ／＼考へてこのやうな鉢を造つたら良いと思つても、焼物師やきものしに實際の栽培上のことが分つて居らなければ、結局うまく行かないから、どうしても栽培家さいばいかが道樂だうらくに餘技よぎとして植木鉢を造るやうにならなければ駄目であると思ふ。現在残つてゐる植木鉢でも非常に佳いと云はれるものは、このやうにして造られた鉢が多いのである。植木が好きで餘技に自分で造つた鉢は、焼物としては甚だ價值がないかも知れないが、なんとか雅味みやみがあつて捨て難い。これは實際を知つてゐる賜であつて先づ實際を知つて猶且つ焼物の技が上達して初めて立派な鉢が生れる。(一一、三)

自然と趣味生活

漠々たる平原の中を通る一本道をどこまでも歩るき續ける事は、恐ろしく單調で退屈な旅行であらうと思ふ。人生も亦遠き道を行くが如きものであるならば、急ぐべからずと云ふのみでなく、路傍の風趣に變化があり、美しい眺めが次々に展開して來る行程が望ましく。

同じ荆棘の道でも花もあらうし蝶も舞ふ事もあらう、茨にのみ氣をとられて、それを如何に越えて行くかを考へて歎息するより、一休み毎に花を楽しみ、蝶を眺めて次の行程への英氣を養ふ事が望ましく。

長期戦と云ひ、長期建設と云ひ、さうした非常な勇氣と努力と緊張と忍耐とが長期にわたつて要する時にこそ、國民の日常生活に、戦ひに準備が必要なやうに、趣味の方面とか娯樂の方面とかに於て休息をとる必要がある。さうして、その種類を選定するのに、一時の興味や流行からのみ選ばず、日本民族の遠い將來の事までも考へに入れて置くことが必要なことであると思ふ。

近來べからず讀本とか、××べからず集など云ふものが出來たりしてゐる。これは國民精神總動員運動の委員會で決定した事項に似たやうなものであるが、一體かうした中止したい事項が出來て來て、誰れの眼にも止まるやうになつてから、べからず集などに加へられるよりは、その種を詩かな

い事の方が策としては上策と云へるものと思ふ。

たとへば電髪でんぱつの如きものや、昔はお花見かチンドン屋以外には一寸見られなかつたやうな化粧けいずやくまどりをした顔が事變下の街頭に散見するのは、洵まことに似合はしからぬ風景であらう。かうしたけばくしい服飾類ふくしよくるるはかうしたものが一般の好みにまでなり切らない間に芽を切り度いものであつたが、過去の事を云々するのは、痴人ちじんのたはごと然たる事であつて、むしろ今は我々は如何にして日本人としての矜りけいりを持つた化粧なり髪なり服装なりを一般化して行くかと云ふ事に、努力しなくてはならないのである。

さうしたためには私は幼い子供の頃から家庭に於いて、よい趣味の感化を受けて洗練せんれんされた情々を持つやうに育てることが理想だと思ふのである。そこで家庭で主人の趣味や娯樂の獨善どくぜんは絶対に反對である。自分が面白いから云ひ、自分の慰安に必要であるからと云つて、勝手なものを選ぶことなく、これなら自分の健康にもよい、子供のためにもよい、家族も共に楽しめると云ふやうなものがよい趣味であり、よい娯樂ごらくであると思ふ。

私は一番さうした意味から無難ぶなんなものは自然を對象たいしやうとした趣味だと思ふ。例へば蟲を飼ふとか、

魚を飼ふとか、植物を楽しむとか云ふものである。又それ等を野外に採集するのもよいが、併しそれが科学者の學究的な採集ではないから、どこまでも趣味や興味を持つた潤ひのあるものであつて、どこまでも科學的な冷めたいものであつてはいけないと思ふ。自然の生活を細かに觀察し、それに親しんでゐる間に、自然を深く理解して來るその結果は非常に人生に利益があるものである。

子供の時代から園藝に親しませて行く間に、種子を蒔き、苗を育て、花を咲かせ、實を結ばせるまでの手入れをしてゐる間に、種子が芽生へるのに必要な温度や水分が理解出來、芽生へた苗の手入れも解り、花を咲かせるまでの最もよい手入れ法も會得して來るやうになるのである。さうした事が解つて來ると、無言の植物を見ても、その植物が今何にを要求してゐるか、今どうしてやればよいか解るやうになる。勸の働きが鋭くなつて來て、無言の植物の言葉が聞かれるやうになるのである。この勸の力は飛行機の組立てにも、内燃機關の修理にも大きな役目を持つものである。

小動物を飼育することも植物を培養することも、この勸を養ふことに於ては同様である。子供のためにこの自然に興味を持たせるやうに導くと云ふ事が根本にかうした利益がある以外に、情操教育を、又その性格を潤ひあるおつとりしたものにするに云ふやうな點にもあるのである。

私は手工教育の目的はよい木箱や上手な竹細工をする事が目的では無く、子供がその箱を作るた

めにいろ／＼工夫し勸を働らかせて、勸を鋭くする事が第一で、次は手先が器用になるとか、いろ／＼の副産的な効果が得られるのである。

次にどうした植物を興へるのがよいか、どうした動物に興味を持たせて行くやうに導いて行くのがよいかと云ふ事は、子供の家庭では重要な問題であるが、それは一言にして云へば成る可く日本人に相應しいものを選ぶのがよい。

例へば畸形なもの、珍奇なもの、突飛な色彩のものなどは感心しないものである。又動物の中でグロテスクなものや性質の残忍なもの、鬭争性の強いものは感心しない。

子供は色彩の美しいものを好むものであるが、さうしたものからだん／＼枯淡なわびたものにも理解させるやうに導いて來る事が大切である。美しいものを好むと同時に子供は物を育てる喜びを感ずるものであるから、雁來紅のやうなものなど、派手な色彩の中に落着いた澁さのあるものから、山草や蘭などにも趣味を持たせて行けば、決してけ／＼しい化粧を好んだり、顔にくまどりしたのを喜ぶやうな事は無くなると思ふ。

動物にしても少し物が解つて來れば、美しい色彩だけのインコなど面白くなくなつて、澁い野鳥

などに興味を持つやうになる。さうした子供は決して電髪を好むやうな事は無いと思ふ。

猫を愛する子供と犬の好きな子供とはその性格や好みまで異つて来る。犬を好む小兒は勇敢な動物的な性質のものが多く、猫を愛する小兒は鈍感さうに見えて物に凝る性質のものであるが、かうした子供は技術者として導いて行けばよいのである。又大陸に將來活動して行かうと云ふやうな少年は多分犬好きの少年であらう。

動物でもかうした異ひがその犬と猫に於てあるので、その選び方や與へ方も一應考へてやる可きである。今後日本の男子は大いに志を大陸に伸ばす必要もあるから、犬など愛育するやうな方面から導いて行く事も一つの方法である。又犬は仔を産ませて仔犬から育てさせると仔犬に對して親のやうな氣持になり、粗暴な子供は落着いて動物に對する愛などを持つて来るものである。

又落着いた枯淡な味の人間を作り度い時などは、地味な黒い目高とか野鳥のやうなものに興味を持たせて行く事も一つの方法であらう。

かうした趣味の方面から子供を育てて行く一面からは現實の喜びがあるのである。花を作つて自分の部屋に飾つた時、これは美しい花を花屋から求めて飾つた時とは異つた、その花を育てた喜び

も共に樂しめるのである。又自分達の手で咲かせた花を自分達の祖先に供へて拜禮する事も、敬神崇祖の念を持たせる上からもよい事であらう。又自分の畑で出來た花を友人に切つて贈るのもよい。花の他に野菜を培養する時は花と異つた喜びがある。種類は近くの八百屋で求められるやうな作り易いものから始めて、八百屋で一寸求められないやうな珍しいものなどに入つて行くのであるが、自分達の勞働から生れた野菜が食卓に出る事は、非常に愉快なもので、家族の全部が自分達の小さな畑や鉢から生産された野菜を見ると必ず微笑む事であらう。かうした家庭の空氣はいつでも望ましい事である。

動物など飼ふ事もかうした喜びは必ずあるものである。

園藝の好きな人に動物の嫌ひな人は無いやうである。鶏と畑などは對のやうなものである。兎と畑も共に樂しめるものである。都市で空地の少ない所に畑の一坪すら求める事は無理なところがある。さうした場合は鉢でも野菜は育つし、又空地の無い場合はさうしたところに向く他の動物や植物がある。例へば屋根の上に育てられてゐるさつきなどよい例である。

東京のやうな大都會の周圍には空地が利用されないでそのまま雜草が生えるにまかせたところがある。かうした土地の整理利用も最近考へられてゐるやうだから、かうした土地が市民の健康と趣

味を兼ねた園藝場となり、さうしてその土地から何かの生産のある事は全く一石二鳥のよい考へだと思ふ。かうした荒地の利用の早急に進められる事を熱望してゐる。

自然を楽しみ、自然のものに對して趣味を持つてゐる人は、成人になり、時間と財力に餘裕が出来ても不道德な行爲や獨善的な遊びや娛樂には走らぬものである。これがかうした自然を對象とした趣味の最低の効果である。

これは主として都會地へのものであるが、地方殊に農村漁村山村には、共同の娛樂と修養場所がある事が理想であらうが、さうした方面の事は地方地方に依つて考へられてゐる事と思ふ。

我々が家庭に於て自分の趣味として選ぶ場合も娛樂として取り入れる場合も、それを選定する時に、一時の流行や興味のみによつて選定する事なく、いろいろの方面から考へてこれならよいと云ふものを選んで行くべきであらうと思ふ。我々が今次の事變で日本の姿をほんとうに認識し得たやうに、我々の日常生活に取り入れる趣味や娛樂も誤りなく、我々日本人に適當したものであるかどうかを考へて選定すべきであると思ふ。(一四、二)

魚と語る

池に飼ふ小魚

三月、水温みづぬくむ頃になると池の小魚が動き出す。私は中庭の殆どを池にして水を楽しみ、岩を楽しみ、錦鯉にしきこひを飼ひ、小魚を飼つて楽しんでゐる。

小魚こさかなの鯽はな、鯉こい、鯉こいの三つが最も多く元気で育つから面白い。かうした小魚は冬の寒い間に雀焼さくやきにする位を入れると、鯽は二、三年もすると三四寸位に成長してゐる。

鯽はなと云ふ小魚は實に食意くい地の強い魚だ。一日中池の底を掘り返し掘り返し、どんな小さな餌も残さず食べてしまふ。氣品のある魚ではないが、鯉の食べ残りなど食べさせるのには都合がいい掃除役だ。これが四月に入ると、群を成して泳いで廻る。これが百位大小で群を成し底に影を落して泳いで行く圖は、春々遅々とした日永を味はせて呉れる。この他には餘り藝の無い魚だが池を掃除して呉れるので大きい池には是非一群必要な存在である。

鯽はなは形も動作も案外すつきりしてゐて面白い。泳ぐ時ヒラ／＼と軽く動いたり、餌えを求めながら

時々巾の廣い體を花瓣くわいべんが舞ふ様に横にくねらせながら何にか戯まれるのが、實に長閑な姿だ。五月に入つて赤く鱗の色が冴えて来る頃までは面白い魚だ。

鯉こいは鯽はなに似てゐるがそれ程野生的では無い。さうしてもつと人里近くに住む魚と云ふ感じだ。これは飼つて面白い事は、井戸水の池で繁殖はんしよくする事だ。六月に入ると目高めだかより小さなのが孵かつて大きな姿の魚を岩の蔭などに避ける様にながら水苔を口の先でつついてゐるのは可愛いもので、冷血動物に似合はぬ愛情がわいて来る。毎年その頃になると、岩の蔭などに孵かつたその姿を求めて數へてみたりする。

この頃からだん／＼暑くなつて来ると野性的な鯉こいの動作が面白くなつて来る。鯉こいも井戸水の水温なら飼へる魚だ。さうして夏の食欲の盛んな時には水面に小蟲でも投げると三尺位先から飛びついて来て、水面にピチンと躍とび上る姿は初夏の姿だ。(一三、六)

鱸 釣 り

體位向上と云ふ歳でもないが、私が釣りを始めたのは健康のためであつた。十數年前アトリエにはかり居た私は、少し運動したらと會ふ人毎のやうに奨められて、外出嫌ひの私も、少年時代の釣りの思ひ出をもう一度實現してみようと、私の郷土に少し似た奥多摩の鮎に出かけた。併し私にはこの鮎釣りは鬼門であつた。と云ふのは鮎がいけないのではなく、奥多摩地方へ行くと、蟻子が居て、これにやられると私の手足は赤く腫れ上つて、その後がよくないのである。そこで特別に手袋と靴下を用意したがやはり駄目で多摩川行きはしぜん中止してしまつた。それから、その年の秋、友人の醫者が蟻子の居ない釣場へ案内すると云つて、利根川の鱸釣りに同道して呉れた。それから私の鱸釣りは始つてもう十數年になる。鱸と云へば、海の魚で、海岸近くに棲息してゐると云ふのが常識だ。川の鱸と云ふものは餘程の食通でないといふ人が多いやうだ。私が川鱸を釣り始めたとき云ふ事は、私が食通で川鱸を始め

たのではなく、山國に育つた私は海の香が嫌ひで川の釣りばかりを選びそのうちでも鱸釣りが一番面白くて、鱸以外の魚は殆ど釣つた事がないと云ふまでの事である。

利根川の鱸釣りでは土地の人達より東京から行く私の方が確かに多く釣り上げる。それは第一餌が新らしくて上等だと云ふ事が數へられる。利根川へ行つてその土地で餌を求めて釣ると云ふ便利はないし、若し餌があつても遠くから買つて來たもので餘り新らしい餌ではないので、何度か行つた事のある人は必ず東京の餌屋から求めて行くやうになる。さうしてその新らしい餌を惜げなく用ひると云ふ事が鱸釣りの獲物を多くあげると云ふ理由の第一になるものだ。

私はいとめと袋餌を持つて行く。併しそれは明日釣りに早朝から行くからと云つて、前の夜買つて置くわけではない。たとへ一汽車遅れでもその日の朝その日の餌を買つて行く。それは一晩自分の家に置くのと餌屋に置くのとでは、餌の悪くなる變り方が、目立つてひどいからである。それは永い時間汽車に乗つたり、釣り場へ行つて又次の釣り場へ移つて行く間にさへ悪くなつてしまふのだ。

そこで必ず私はその日の早朝求めて行く事にしてゐるのだが、而も夏の暑い間は出来るだけ新らしい餌を釣り場まで持つて行くために、餌桶の上に氷を入れて少し涼しくして持つて行くやうに工

夫してゐる。

私のかうして持つて行つた餌は私に初て鱸釣りを教へた老船頭が、その土地では見た事がない程非常にいきがいいと云つてほめてゐた。私の釣りの餌はこの老船頭から満點をもらつた品なのである。

次にこの鱸を釣るのにその居る場所を見出す事である。これは東京から上等の餌を持つて行くやうに、東京で仕入れたものでは間に合ひ兼ねるものだ。これは何んでも土地の上手な船頭や釣師に就いて教へられ、さうして何回も釣つてゐる間にそれが理解されて来るものなのだ。それはその人の持つ勘で、勘の悪い人は何回やつても駄目で、結局柳の下ばかりをねらふと云ふやうな事になる。少し勘のいい人なら、現場に依つて二回も説明を聞けば、次からは自分一人で歩けるやうになりその間に自分の體驗を利かして来る。

私は洲の出鼻があつて、その下流の水によんだやうなところを選んで釣つてゐる。これは永い間の經驗で、かうしたよどみには居ると云ふ事が理解出来るやうになつたからだ。

この釣り場所は魚を追つて移動して行く。鱸釣りは五月頃に始つて十月頃に終る。この間五月頃には河口に近い方面から釣り始めて、十月には餘程上流に移つて行く。この間利根の流域を上下す

るうちに、その土地の人情などにふれて面白い。それは利根の流域が下流が早く交通が開けて、上流がその後開けたために、その交通の開けた時と程度に依つて、土地の人情が純朴であつたり、都會的であつたり、質朴であつたりする。

道具は釣り道具屋で作らせてもいいが、私は冬の間、釣りに行かない間にテングス二本合せて撚つたり、絲巻を作つたり、全部自分で作つたものだ。荷物を入れるリュックなども夜の客の無い時に作つた手製である。さうした自製の道具には自分の趣味を十分盛る事が出来、又一番自分に用ひよいやうに出来てゐる。又使用するにも一番作つた者の苦心を知つてゐるだけに親切である。

餌のつけ方が、折角新しい、上等の餌でも、つけ方が下手であつたり悪くては駄目だ。釣鉤の先をよく調べ、手早く餌を房々と釣鉤に掛けるのであるが、この掛け方が上手に出来、自分で若し魚なら一寸食べてみたくなると云ふやうに思へるやうな掛け方をしなくてはいけない。さうして餌の死なないやうに取り扱ふ事も必要な事である。

これを流れに投げ込んで、だん／＼絲を繰出して、十間とか十五間とか先に出すのであるが、それはやはりこの邊と思へるところまで繰り出すのである。さうしてそれに魚の來るのを待つのである。

昔名醫が病人の絲脈をとつたと云ふ事が語り傳へられてゐるが、この十間も先の釣鉤に集る魚がこの絲を持つた手先に響くその響き方で鱸かさうでないか、又それが何であるかが解る。又それが今何をしてゐるか、食つてゐるか、餌を少しづつぬすんで行く魚か、ばつくり食ふ魚かが解る。私は魚釣りは、健康にもいいし、都塵を避けて浩然の氣を養ふにもいいし、又そればかりではなく、この針釣の先に來る魚の種類から動作までが一本の絲なり、竿なりによつて解るやうになる。この勘を育てると云ふ點でも確かにいい事だと思ふ。

何の仕事をするにしても、勘の悪い者は駄目である。

人間でも口に鉤でも引かかれれば痛みが堪へられないと同じやうに、この鱸も口がしりでかかるとひどくあばれ廻つて逃げてしまふ事がある。そこで私は釣鉤を十分飲ませてから釣り上げる事にしてゐる。誰れかが鉤を飲み込ませて釣るのは、釣りの外道だと云つた。併し私は釣り上げるのに、口がかりで痛い思ひをさせて、あばれさせて釣り上げるより、胃の中まで飲ませて、苦しませないで釣り上げた方が、その魚を料理しても印象がいい。鉤を飲ませて釣ると痛くないのかあばれたり威嚇するやうな表情はしないから、釣るのにも面白く釣れて、何んだか魚の方から釣られて來るやうに思はれる。

かうして釣つた魚は料理されて食卓に並べられても悪い氣持はなく、楽しく味はふ事が出来る。私はかうした魚を笑つて釣られた鱸と呼んでゐる。この笑つて釣られた鱸は決して殺生のうちに入らないと、道重大僧正から云はれたものである。

かうして釣り上げた鱸は船の中のいけすに生かして置いて歸る時に皆殺して持ち歸る事にしてゐる。かうすれば魚の味がいいとか悪いとか云はれてゐる。最初の頃は頭を老船頭がサイダー瓶でこつんとやつたものだが、それは何んだか肉が少しかたくなるやうな氣がした。

海の漁師は網に何十か一度に入つた時には鱸の目の上の少し奥に依つたところをカギで突いて、グル／＼と廻しておとすと味がよいと云つて居るし、市場に出る鱸の全部が殆どさうしたものである。

私はそのどれでもない方法を今やつてゐる。それは、鱸の側線の尾に近い一番幅のせまいあたりを錐で突く事にしてゐるのだ。さうすると血が少し出て動かなくなつてしまふ。かうした鱸は一番味がいいやうに思はれる。かうして釣つて來た鱸を美味求真の著者木下翁に届けた事があつた。すると翁から手紙で、季節の最高の味覺と云ふ最大の形容詞を用ひたお禮が來た。併し多少のおせじはあつても美味求真の主人にこれまで云はれば釣られた鱸も將に瞑すべきであらう。(二五、二)

釣 ら れ る

毎年釣の季節に入る頃になると、一回や二回は新聞か雑誌から何にか書かせられるか、座談會の出席にいろ／＼の方法で引張り出される。以前には釣り場まで寫眞機を持つて従いて行くから何日頃まで一度釣りに行けなど云ふ新聞社もあつた。これでは忙しい間に時間を作つて、一息つくための釣も、自分が寫眞機に釣られに行くやうなものだ。さう云ふ時はむしろ雨が降ればいいと願ふ。さうして申込んで来た記者に、あからさまに、

「君、釣りのお供だけは御免だよ」と云ふと、

「併し一日社にくすぶつてゐるより、社用の船遊びの方がい／＼からなあ」と、かうなると、寫眞機に釣られるどころか、釣り堀の魚並だ。

一つの船で釣をやるには、親しい友人でもいけない。やつぱり多少競争心も働かし、自由に自分の坐る位置も取れない窮屈さもある。釣り船で客をするなら、その日は釣らない積りでないと駄目

だ。それで前日行つて釣つて置いて、それを料理する方法が一番い／＼、それを寫眞機を持つて、早く大きいのを釣れと云はないばかりに、大きな目玉の様なレンズに睨められてゐては落着かない。

二三年前、ラヂオでも新聞でも釣の話や座談會が流行した事があつた。その頃、永田秀次郎氏がラヂオで釣の話をした事があつた。その話の中で、私の釣の事を實際より割増し附きで放送されて、たうとう釣師仲間幕の内に引張り出されてしまつた。ある時永田氏と同席する機會があつたので、

「私は放送で、貴君を大いに恨んでゐますよ、自分で釣りに行く時に高田實の變名で行く氣持で他の釣り師の場合も考へて呉れなくては、どうも近頃、方々の雑誌や新聞から釣狂から私を釣りに來て困りますよ」と話すと、

「いやどうも、それは」と自分も實は釣場まで釣りに來られるのには弱ると閉口してゐられた。

私の釣は郷里に居る頃にはやつてゐたが、東京へ出てからは三十年も止めてゐたのを、子供の診察に來る小兒科醫から奨められて始めて、最初は郷里に似た所と思つて奥多摩に行つたが、プヨが多くて、これにやられると、負けるので、夏だと云ふのに厚地のラシャのゲートルを巻いたりする始末で足はどうにか、防げるが手や顔はどうにも仕様がな。プヨの居ない所を求めて、現在の利

根川の船釣りが丁度探してゐた釣場所の要點を全部持つてゐるので、爾來十一年毎年夏には時々暇を作つて出かけてゐる。

始めの間、取手へ行つて、その船頭の貸船でやつてゐたが、その船が實にボロ船で、小さくて、夜釣りなどやるには船の木賃宿の様だ。そこで自分の船を作つたり、客用のを作つたり、土地の船大工では形が悪いから東京から作つて行つたりした。この三つの船は五間に幅一間位のものだが、一つを友人に貰つてもらひ、一つは殆ど駄目になり、船頭も老人で氣の毒だし、今は友人の紹介で木下を持つて行つてゐる。そこに二つ置いてあるが一つは殆ど使へないので、やつかい丸になつてゐる。こんな事も釣好きの人達には知れて、私は釣りに行く度敷の割合に釣狂の様に思はれてゐるやうだ。

汽車で行く途中も袴を着けたり、夏羽織の紋のあるのを着て行く、これは釣に行くやうに見られたくないためで、一寸知人に會つた時も「やあ、釣りですか」など云はれた事がない。釣の仕掛など籐の中をくりぬいたステッキの中に入れてゆく、桶なども一見トランクの様に見えるやうにして持つて行く、先づ、どこかへの旅行としか見えない。こんな事もかへつてうるさく、狩衣を着けてやるとか、紋着羽織袴で釣るとか云ふ事になつてしまつた。

利根川は鱸ばかりで釣れる期間が短いので、最近、友人に誘はれて水戸の涸沼にはぜ釣りに行つた。ところがこゝが、魚の寶庫のやうな場所で一年中何かしら釣れると云ふ所で、子供にも女にも釣れて家族的な釣にはいゝ場所で、二三回家族づれで出かけた。そこには屋根のある船が無くて、たうとう東京から船を作つて持つて行つたが、大きな船をトラックで持つて行つたので、どこか悪くなるつてゐたのか、初めて乗つた日に水が浸入したり、今年は、大雨続きで、船宿が水びたしになるやうで、未だ十分その船を使つてみない。いづれ平和になつたら大いに利根川の暇な時に利用する積りだ。

川の魚を可なり釣り上げたが、自分も可なり釣りの爲めに他から、何に彼と、何回も釣られてゐる。ほんとうに釣りを楽しむには、自分もほんとうに釣られた方が面白いかも知れない。併し嫌でも釣つて行かれるのは、御馳走の中へ蟲が入つてゐたやうで、珍味でも一寸頂きにく。

鯉の七癖

池の中を無心に泳ぎ廻つてゐる鯉の一尾一尾にもそれ／＼異つた癖がある。又それ／＼特異な性質がある。併し犬や猫のやうに明瞭なわけではなく、又あれ程性質の種類も多くもない。細かくは解らないが、一つの池の中に澤山泳いでゐる中にさうしたものがあつたのを池の上から眺めてゐるのは面白いものだ。水のやうに何の變化もないものでも動いて居れば、それをぢつと眺めて居ても倦まないものだ。まして錦鯉のやうに美しいものがあらゆる形とポーズの變化を見せて泳ぐのだから半日位は決して倦きなす。

鯉の中には性急ちなのがゐる。これは神経質のものに多く、病氣にかゝりやすくて、病氣に罹ると脆い。不斷でも物に驚きやす。形は少し瘦せ型で、姿のいいものが多い。鱗は銀鱗や金鱗のものが多くて鑑賞上には一番美しい。敏感で天候の變化などにも他の鯉より早く感じるらしい。水の變化にも繊細な神経を持つてゐる。水の壓力に對する抵抗が弱く、水深の深い所には棲めないさ

うだ。南洋の珊瑚礁などにゐる美しい銀鱗の魚は決して深いところには棲んでゐないといふ。

色彩では白色のものか、それに近いものが多い、犬でも猫でも純白や雪白のものは弱いやうに魚でも白いものは弱い。見てゐると鱗の表面に神経が裸になつて出てゐるやうに感じられる。こんな種類の鯉は美しい。しかし、若いのを普通鑑賞用の池に入れても育ちにくい。

私の池に二尺位の雪白の、銀鱗の錦鯉がゐた。これは美しかつたが、普通のものやうに通俗的でなく氣品の高いものだつた。まあ鯉の中の貴族と云ふ感じだ。これが病氣になると美しい肌が桃色に充血して實にいた／＼しいやうな姿になつて、光線にもいら／＼するやうに思へる程神経が尖つて来る。これが泳ぎ廻るのに體がだん／＼硬直して來ると、曲線を描いて泳げなくなる。さうすると方々の岩などに突きあたるやうになる。さうなるともうだめだ。ひどいになると熱にうなされたりやうに泳ぎ廻り、はね廻る。こんなのを見ると鯉を飼ふのも嫌になる。だが、元氣の時の魅力は充分それを抹殺して呉れる。

これと反對に大様なのが居る。これは太つてゐてよく人に馴れる。こんなのが一番飼つても可愛らしい。この種類になると鑑賞魚と云ふよりも寧ろ愛玩動物と云つた方が適當かも知れない。

神経質なものには若いのが多く性別では雄が多いのに反して、大様なのは可成り長生きするのが多

くて雌が多いやうだ。人間でも男より女の方が平均年齢が多いやうに、魚にもそんな事があるのかも知れない。色彩では黒色かそれに近い色が多いやうだ。形は太つてゐるのでよくないが、犬の雌が雄より愛想がいゝやうに鯉でもこんなのはよく馴れる。

私の庭の池に二尺五寸位でクロと云ふ真鯉マニギの十歳位のがゐた。これがよく馴れてゐて、足音を聞きつけると直ぐやつて来た。聲なども聞き分けたく、いつも餌を呉れる人の聲を知つてゐた。いつもノロノロ泳いでゐた鯉だつたが、その聲を聞きつけると、太つた體を振り振り急いでやつて来て、丁度犬がチンチンをする形で直立に泳ぎながら水面から口を半分出して餌をねだつた。この大様な鯉は、いつも水の表面近くに泳ぎ廻つて居る事が多い。馴れない神経質なのや、おどろいたのは決して水の表面には泳ぎ廻らない。馴れた鯉が急いでやつて来る時は背鰭セビレが水の表面に出るやうにして水紋みづいんを畫きながらやつて来て、尾の方を下げて直立する。

手を出すと指をシャブつたりした。指をシャブるのに固く感じるやうなのはまだ充分馴れ切つてゐない。クロなどになると何んだか人の指と餌とは知つてゐて、指の時には加減してシャブつてゐたやうな氣がした。

指をシャブらせると痛く噛むやうな鯉は未だ直立して泳げないし、一度餌を口に入れるとその度

(一) 鯉の三態



池 と 鯉

(二) 鯉 三 態



池 の 一 部



池 の 鯉

に姿勢をくすす。こんなのはまだ十分に馴れてゐない證據だ。

クロはよく人から可愛がられて、焼魚や鮎が食卓につくと來客でもクロを知つてゐる人だと、きつと少し残して、箸で摘んでクロの口に入れてやる。さうするとちつと口を開けて待つてゐた。

御飯などスプーンで口に流し込んでやると上手に受けて食べた。こんなに馴れると冷血動物とは思はれない。温い血の流れてゐるもののやうにこちらの情がうつるものだ。

色は名のとほり黒で形も決してよくなかつたが池中の人氣物であつた。それが去年の初夏の頃から井戸水が變つて鯉が皆弱つたので鯉屋の池に一時移したが、一ヶ月程して死んでしまつた。この時は黯然としたのである。

クロは池に來てから死ぬまで七八年も人氣物だつたから、クロが死ぬと池の中が急に淋しくなつて、今では少しばかりの雜魚と小さな鯉が二十尾ばかり黄ばんだ柳の下に泳いでゐる。何となく秋風冷氣を覺ゆと云ふ感がある。

いつでもクロの後について泳ぎ廻つてゐた小魚がゐた。この小魚はクロが食べ物をお口にに入れて美味くないと鯉をバク／＼と大きく動かして口から出すのを拾つて食べてゐたのだつた。この點一寸我儘で、餌の好き嫌ひもあつて、お山の大将といふ感もあつた。こんなに馴れたのが一尾でも居る

と、太つた大様な五六年以上の鯉はこれに習つて馴れて来る。それは人間の愛の氣持が反映するやうに思はれる。

おどくしたのがある。何んとかく眼を四方にキョロ／＼動かしてゐて、一見哀れげに見える。こんなのは非常に神経質で、何かの時にひどく驚かされたか、前に育つた池が絶えず物に警戒しなければならぬやうなところであつたものらしい。こんなのは、決して太つたり、どん／＼大きくはならない。私の池にもそれがゐて、ヒガミヤと云ふ鯉名がつけてあつた。こんなヒガミヤのやうな鯉は網を入れて落葉でも取らうとすると、その影に驚いてパツと逃げる。それと反對に太つた鯉は網に入つた落葉を食べ物の積りか何かで追つて來たりする。

ガツ／＼したのがある。こんなのは養魚場で育つたのにある。これは、その池でつけられた習慣が残つてゐるのだ。絶へず池の底を口の先で掘返し掘返して、物をあさつてゐるのを見ると何んだか掃除屋と云ふ感じがする。錦鯉などが食べ残した餌をたんねんに拾つて食べてゐる。さうして、食ひしんぼの癖に決して人に近づいて餌をとらない。綽名を奉つてタルマヤとか掃除屋など呼んでゐる。こんな鯉を見た友人が「なる程ネ、鯉にも氏ありだネ」などと云つた事がある。

とても氣どつたのがある。形のいゝ雄に多いが、よく馴れた太つた鯉などとは行動を共にしない。

餌もそんなものと一緒にとらない。餌を投げても見向もしないで自分の好きなところへ行つてしまふ。と云つて、餌をとらないわけでもない。一尾の時にはよく食べてゐる。何んとかく俺はお前達のやうな俗物とは交際しないよと云ふ感じである。こんなのは形がよく、すつきりしてゐて色彩の美しいのが多いだけに、なほ目立つてそんな感じが強い。

武士は食はねどといふやうな鯉がゐた。利根川で捕つて來た川育ちの二尺位の大きさの眞鯉だつた。池に入れて四五年も居たが決して餌を口にしなかつた。何んとかして餌づけようと、みみずなど口の前に落してやるが頭を横に向けてしまつた。浪々の身ながら人の情には縋らぬぞと云つた態度だ。

さういふのはだん／＼痩せて行つて、永い間にだめになる。しかし川で育つた鯉は姿が立派だ。形がすつきりしてゐるし、どの鱗もよく發育してゐて、如何にも武士といふ感じがする。澤山の養魚の中に入れても直ぐ解る。

だが、だん／＼痩せてひよろ／＼して來ると尾羽うち枯らしたといふうらぶれな感じがする。しかし、もと／＼病氣で痩せたのでないから決して急には死なないが、永い間に痩せてだん／＼だめになつて來る。

姿のいゝのは雄に多いが、育て方に依ては形の悪いのが出て来る。幼魚時代に餘り餌をやりすぎて育てた鯉は、頭がボラのやうに太つて形が悪い。又そんなのは體の割合に鱗が小さくて、如何にも養魚と云ふ感じが強い。

鯉のひげに三つ位の形があるのが面白い。八字形にだらしなく下つたのがある。又先の上にはね上つたカイゼル形がある。どうかして、そんなになつたのだらうが面白い形だ。それから、八字の先がやゝ外にはねかへつた普通形のものがある。

それから、これは癖には關係がないが、一匹目が大きくて兩方に離れたのがゐた。これには或る女流舞踊家の名が綽名につけられてゐた。それから、左の目のまはりが青く右の目のまはりが赤い鯉がゐた。これはチンドン屋と云ふ名で呼んでゐた。白と黒とのまだらの鯉がゐた。いゝ錦鯉だつたが、一方の目のまはりが黒いので如何にも悪相だ。そこで悪漢などといふ有難くない綽名をつけられてゐた。

色彩と形の感じから狼など、云ふのがゐた。これは名前に反していゝ鯉だつたが、友禪などいふ名のが却つて餘りよくなく、ドラなどといふ鯉が名に反して珍品だつたりしたが、この呼びなれた綽名の中にはある感じを巧に表現したものがあつた。(一一、五)。

公魚を解す

新春の休暇を利用した釣りは公魚を獲物に狙つた釣りが多い。西北の寒風に雑音も凍りついたやうな静かな山中の湖水の、厚い氷に穴を開けて、絲を垂れる釣師の境地は、釣三昧の境地を知らぬ者には、一寸酔狂としか思はれない姿だ。

寒さを避けて冬を送る人々から観れば白く湖水一面に張りつめた氷の上に穴を掘つて、特に西北の風の吹くやうな寒氣の酷しい日を選んで、釣絲を垂れる公魚釣りの心境などは理解らないもの、一つであらう。

何にか釣りの特輯などやる雑誌は、私を加へてプランをたてるらしく、二尺の獲物を三尺位に報告させられるやうな自慢話までやらせられる故か、私の釣りは私に會ふ人の、私へお世辭の話題を澤山提供して、話がとぎれたりすると「先生冬は何をお釣りになりますか」

「私の釣りは五月から十月までですよ」

「すると？」

「川鱸が専門で」

などいふやうな事がある。併し私の鱸しかやらない事を知つてゐる友人が、自分の面白かつた釣りを、私にもやれといふので、奨めに來られると、鱸以外の道具を用意してゐないので困る。先づ暫らく待つて呉れ給へと、早速道具を求めたりしなければ出かけられない。何んだか借り道具では、釣りをしながら、三杯目にはそつと出しといふ、居候気分がして嫌だ。ハゼ位なら、直ぐ用意が出来るが急には用意の出來ない釣りがある。

暫らく前、知人から山中湖の公魚釣りに招かれて、正月の休暇を利用して、友人を二三人同行して行く事に約束した。山中湖の公魚を釣つた事のある友人に様子を聞くと、

「君、寒いよ」と、寒がりやの私には、駄目だよと、いふやうな返事だつた。

そこで、招待した知人に、大變寒いさうだから、私には、どうも向きさうにないといふ事を傳へると、それは一般の公魚釣りで、自分のところの公魚釣りは家の中で釣るから、どんな寒い日でも暖かですよといふ事だつた。よく様子を聞くと、移動出来る小屋を氷の上に置いて、その中に火を澤山入れた火鉢を入れて、小屋の小縁に腰を下ろして釣糸を垂れるのださうで、その中は幾分日光

の直射が無いので、外より暗いので、氷の下を泳ぎ廻る魚が、美しい氷を通して見られる。一寸別世界の感じですよ、といふことで、多少興味を引いたので、それではそろつて出かけようといふ事になつた。

その小屋まで行くのが一寸寒いから、少し厚着して來いといふ事で、着物の心配が、釣り道具より先になつた。南國で育つた私は、氷の上など歩いた事がないのだ。氷點以下五度位といふ事で、あれこれ心配して用意しようと思つてゐるうちに、公魚釣りの好期は過ぎてしまつた。

そこで、逆に、今度は、こちらから公魚釣りを自宅でやれるやうに、中庭の池で、公魚を解してみようと思ひついて、霞ヶ浦から公魚の卵を四十萬粒分譲してもらつた。

普通に行けば、四十萬粒の八割が孵るから三十萬尾の稚魚が出來て、それが、成魚になるのは、約四割で、十萬尾位は立派に親魚になるのが、分譲案内にある説明通り行つた場合だが、その何分の一かの成績でも、十分中庭で公魚が釣れるかも知れないと、いふ子供のやうな希望を心中で楽しんでゐた。

丁度水溫が公魚の孵化には最適であり、夏季も攝氏二十五度以上に昇らない井戸水のため、移植には適當であるが、稚魚の天然資料があるか、どうかと云ふ事が心配であつた。

兎に角卵が到着したので池に孵化箱に入れて浮かべて、時々、浮泥を洗ひ流してやつてゐた。四十日位で、孵るといふのだつたが、一ヶ月もすると、孵化箱の周りに、小魚がしきりに集つて來るのでどうも變だと思つてゐると、卵から孵つた稚魚が孵化箱から外に出るのを、食べようと集つてゐる事が解つた。併し、それが解つた頃には、もう卵の殆どが孵つてしまつた後だつた。これでは池の小魚のために四十萬粒の卵を分譲してもらつたやうなものであつた。

そのまゝ、今年は大失敗だつたと思つてゐたし、また公魚がこの池に育つかどうかも解らなかつたので、公魚の事は忘れてゐると、夏、米國から日本觀光に來た女教員の一行が訪ねて來るといふので錦鯉を入れた。その時錦鯉を持つて來た鯉屋が、池の中をのぞき込んでゐたが、「先生公魚をお入れになりましたか」といつた。その時一尾でも公魚が成魚になつてゐた事が愉快だつた。「この池で孵つたのだよ」と、卵の分譲を受けた話をする、「それなら、まだ親になつたのが居ますよ」といつて探したが、一二尾だけしか目につかなかつた。これなら、この池で、公魚が釣れるやうになるかも知れない、忘れかけてゐた、公魚釣を思ひ出した。

今年、稚魚を喰はれない別の池で孵して大きい池に移す積りだ。去年は鯉が何回も孵つては成魚になつた。師走に入つても目高より少し小さい鯉の稚魚が北風を避けた、岩の間に集つて泳いで

ゐるのを幾群も見た、鯉のやうに、公魚が成長するなら、來年の正月には東京育ちの公魚が、來客の食卓に出せるかも知れない。併しまた去年の小魚のやうに、何にか、一寸した事でこの活字になつた公魚だけで終るかも知れないが、兎に角分譲を申込んでおいた。(一四、一)

昭和十七年一月二十六日印刷
昭和十七年一月三十一日發行

住・食・衣



定價二圓五十錢

發行所

著者

朝倉文夫

發行者

末松義良
東京市墨田區池袋四丁目四六五番地

印刷者

杉山退助
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二

印刷所

大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二

東京市國谷區新宿二丁目七六番地

日本電通株式會社出版部

電話四谷七八七七・九八〇五七・九
墨田區東京一三七五〇一番

配給先 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

(六-一五二二-一號委員會協定)

★電建叢書

良、間の消費者の御意見を伺うためにこの叢書が生まれました。任意に購読する間柄を主として衣、食、住に關する諸問題を、本邦の折衝から直接御意見を伺ひたいと存じます。

第一輯 住み心地良し 小住宅設計図集

表紙 赤色レザ 1・箱入美本
定價 一圓三十錢 送料十錢

第二輯 わが家を住みやすく便利にする 住宅の改造案図集

表紙 赤色レザ 1・箱入美本
定價 一圓三十錢 送料十錢

第三輯 小庭園の見方作り方

表紙 赤色レザ 1・箱入美本
定價 一圓七十錢 送料十錢

第四輯 室内の意匠・手入れ・設備

表紙 赤色レザ 1・箱入美本
定價 一圓七十錢 送料十錢

十坪から二十坪前後の庭といふものは、普通庭園者には及ばぬ生活用具です。その小庭園をこの時期に於てどう利用し、活用し、また作つたらいふことを。本書には小庭園に關する見方と、その作り方がさまざまの實例的な圖案を加へて説明されてあります。どうぞ本書を御利用下さい。

★電建出版部の住宅關係書

左の四冊はいづれも好評さく、版を重ねてきた住宅の寫真集と設計圖集です。印刷物の原價の低廉なごきの定價そのまゝのもので、今後再版といふことは難しいかも知りません。いづれも残部僅少のものばかりです。

中小住宅百回撰集

表紙レザ 1・箱入美本
定價 二圓三十錢・送料十四錢

家賃住宅の寫真と設計圖集

表紙・美・麗紙 貼・箱入
定價 一圓二十錢・送料十四錢

家賃住宅の實用建物業集

表紙 美麗紙 貼・箱入
定價 八十五錢・送料十四錢

明朗住宅寫真設計集

表紙レザ 1・箱入美本
定價 一圓九十錢・送料十四錢

★本邦で最大の讀者を持つ

住宅雜誌 朗

一部 七十錢 (送料二錢五厘)
半年分 四圓二十錢 (送料共)
一年分 八圓四十錢 (送料共)

住宅雜誌の權威である本誌は、實にすでに御存じのところと思ひますが、誰れにもわかる、また誰れにも役立つことを目標に編輯される本誌は日に増しその聲價を高められています。本誌一冊の愛讀は、ごにみなさんの實生活を益するかなりに知れぬ所と思ひます。

題の示す通り百個の中小住宅設計圖を蒐集したもので、今後之れを建てられる方に又とない參考書となりませう。見ても楽しい本です。

實際建てた家の寫真とその平面圖をもつて編まれた本書は、これまた家を建てられる方の好參考書と思ひます。幾つかの設計圖を添へました。

本書も、また實際の家の寫真と平面圖と、幾つかの設計圖をもつて組み立てられた、設計圖集の姉妹書です。

家の寫真と設計と、これまた前二冊の姉妹書で、この本には比較的詳細な室内圖も数多く蒐集されて居ます。

★電建出版部の好評書

平尾善保著
改訂版

最新住宅讀本

A5判六百三十頁、挿入圖版七百六十個
裝幀の優美、箱・入・建・築・語・彙・引・附
定價 四圓 送料(内地二十錢・台・鮮・暹・樺六十二錢)

林銑十郎大將、山本英輔大將、賀屋興宣閣下、吉野信次閣下題字 (日本圖書館協會推薦)

永井柳太郎閣下、大熊喜邦、小林政一、飯島幡司三博士、菊池寛、嘉悦孝子先生序文

本書は、平易に書かれた住宅知識の最良の讀本として絶大の好評を博し、各界名士の推薦を受けました。傳説の民間出版物中代表的なものとして昭和十四年夏アメリカの萬國建築士大會に出展せる日本建築士會代表が本書を推薦材料としてミシガン大學、他四大學に寄贈、更に十五、十六の兩年に亘つて獨逸政府よりのお求めに應じて厚生省より獨逸政府に贈られた。向、大阪女子專門、青島女子專門兩學校の教科書となつてゐます。(内容見本附呈)

平尾善保著
圖筆集

明初雜談

平尾善保著
圖筆集

甲南余談

定價 一圓二十錢・送料 十錢

定價 一圓二十錢・送料 十錢

著者の明主義は機微い生活問題から生れたもので、本書は一種の人生教科書です。この頃のやうな世相に於ては特に面白く読めになると思ひます。

この吾勝人が社會を語り人生を説く本書の價値は單に圖筆の面白さのみではありません。これは確かにしつくりと人生を考へ生活を考へさせる本です。

朝倉文夫著
圖筆集

衣・食・住

表紙和紙美觀・圈入製本堅牢
定價 二圓三十錢 送料 十錢

昭和十四年夏に遂行する影響の著者朝倉文夫先生が衣を語り食を説き住を指針するこの圖筆集は世界未嘗の困難に前進するわれ日本民族の生活人に、民族の根元を護へ今後の方向を示すものとして絶好の生活指導書となり、また座右の必讀書となるであらう。

908
116

終